I am Jazz!（ジャズ・スーパー列伝）

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol. 20
Art Pepper【アート・ペッパー】
～ウエスト・コーストが生んだ人気アルト奏者～

Photo by Fresh Sound Records: (JFCD22835)

Profile

1925 年 9 月 1 日米国カリフォルニア州ガーデナに生まれる。本名はアーサー・エドワード・ペッパー・ジュニア（Arthur Edward Pepper, Jr.）。9 歳からクラリネット、12 歳からアルト・サックスを始める。42 年にガス・アーンハイム楽団、翌 43 年にリー・ヤング楽団、ベニー・カーター楽団に参加。私生活では 10 代後半の 43 年に最初の結婚をし娘を授かるが、ドラッグにも手を染めてしまう。44 年にスタン・ケントン楽団に入り、ソロイストとして活躍。同年軍隊に入隊するが、47 年の除隊後に再びスタン・ケントン楽団に再入団し、52 年まで在籍する。この間に飛躍を遂げ、51 年にはのダウンビート誌のアルト・サックス部門人気投票でチャーリー・パーカーに次ぐ 2 位にランクされ、52 年に自己のコンボを結成。初リーダー作を吹き込むなど注目を集め、人気と実力を兼ね備えたウエスト・コースト・ジャズの中心的人物として活躍。ところが、53 年にドラッグの問題で最初の逮捕・投獄を経験。その後も同じようなことを繰り返し、療養のため病院に 2 年間入所することとなる。その間にも離婚、仮釈放中の再逮捕・投獄と一時的に第一線から姿を消してしまう。56 年に復帰しライヴ活動やレコーディングを行うもドラッグと完全に縁を切ることはできず、60 年に再逮捕・再投獄され 3 年間の療養を強いられる。その後再復帰し西海岸で演奏活動を続けるが、今度は肝硬変・膵臓破裂で倒れ、カリフォルニアの麻薬患者治療センターで療養生活を送る。そして、3 度目の結婚後、74 年に三度復活を遂げる。その後は精力的に演奏活動を続け、77 年には初の日本公演を行い、以降 81 年まで 5 度の来日を果たした。1982 年 6 月 15 日脳溢血により死去。享年 56 歳。

AP's Great Album

若い頃からドラッグの問題により表舞台から遠ざかることが多かったが、50 年代から晩年まで名盤と称される作品を数多く残している。下の 3 作品以外にもたくさん聴いて欲しい！

アート・ペッパーの記念すべき初リーダー・アルバム！

サーフ・ライド
アート・ペッパー
（コロムビアミュージック：COCB-53753）

アート・ペッパー（as）、
ジャック・モントローズ（ts）、
ラス・フリーマン、ハンプトン・ホーズ、
クロード・ウィリアムソン（p）、
ボブ・ホイットロック（b）、他

1. ティックル・トゥ 2. チリ・ペッパー 3. スージー・ザ・プードル
4. ブラウン・ザ・ゴールド 5. ホリデイ・フライト 6. サーフ・ライド
7. ストレート・ライフ 8. ザ・ウェイ・ユー・ルック・トゥナイト
9. シナモン 10. ナツメグ 11. タイム・タイム 12. アーツ・オレガーノ

アートの初リーダー・スタジオ・アルバムで録音は 1952~54 年。廉価なロックンロール・コンピ作品のようなジャケット写真は少しイタダケないが、ウエスト・コーストということで我慢しておきたい…。でも内容は最高！ 20 代後半の若きアートの直球勝負的な疾走感溢れるブロウが冴え渡り、スイング感抜群でアドリブも凄まじい！ 全 12 曲中 10 曲がアートのオリジナルで、自分の名字ペッパー（＝こしょう）にちなんで名刺代わりに作ったのだろうか…「チリ・ペッパー」「シナモン」「ナツメグ」「アーツ・オレガーノ」といった香辛料にまつわるタイトルを付けたナンバーが並んでいるのも興味深い。それぞれ曲は短いながら、初期のアートの魅力がギッシリと詰まっていて素直に楽しめる。

ドラッグ問題から復帰したアート・ペッパーの快心作！

ザ・リターン・オブ・アート・ペッパー
アート・ペッパー
（EMI ミュージック：TOCJ-90031）

アート・ペッパー（as）、
ジャック・シェルドン（tp）、
ラス・フリーマン（p）、
リロイ・ヴィネガー（b）、
シェリー・マン（ds）、他

1. ペッパー・リターンズ 2. ブロードウェイ 3. ユー・ゴー・トゥ・マイ・ヘッド
4. エンジェル・ウィングス 5. ファニー・ブルース 6. ファイヴ・モア
7. マイノリティ 8. パトリシア 9. マンボ・デ・ラ・ピンタ
10. ウォーキン・アウト・ブルース

録音は 1956 年。同時期に吹き込まれた名盤『モダン・アート』や『ミーツ・ザ・リズム・セクション』なども捨て難いが、ドラッグ問題を起こし刑務所暮らしから復帰した後、最初に吹き込まれたこの作品も忘れ難い。ジャック・シェルドン (tp)、リロイ・ヴィネガー (b)、シェリー・マン (ds) といったウエスト・コーストの名手たちを従えている点も興味をそそられるが、その仲間たちがアルバムのオープニングを飾る「ペッパー・リターンズ」というタイトルそのままに、漸くシャバの空気を吸うことができたアートを歓迎し、明るくスインギーに盛り立てる雰囲気が伝わる。「ユー・ゴー・トゥ・マイ・ヘッド」「パトリシア」等バラードの美しさも際立つ。ウィリアム・クラクストン撮影のジャケット写真も渋い！

アート・ペッパーの最後のステージを収めたライヴ作品

ザ・ラスト・コンサート 1982
アート・ペッパー
（ビクターエンタテイメント：VICJ-61503）

アート・ペッパー（as）、
ロジャー・ケラウェイ（p）、
デイヴィッド・ウィリアムス（b）、
カール・バーネット（ds）

1. ランドスケープ 2. トーク 3. オフェリア 4. トーク
5. マンボ・コヤマ 6. 虹の彼方に 7. トーク
8. ホエン・ユーア・スマイリング

真っ赤なガウンを羽織いリングに向かう老練なボクサーのように左ストレートを放つジャケットが印象的な本作は、アートが脳溢血でこの世を去る僅か 16 日前、最後のステージとなった 1982 年 5 月 30 日の『クール・ジャズ・フェスティバル』出演時の模様を収めた記録。「ランドスケープ」「オフェリア」「マンボ・コヤ」というアートのオリジナル 3 曲を含めた計 5 曲に加え、曲の合間にアートのトークも収録されている。中でも「マンボ・コヤマ」では 17 分にも及ぶアートの白熱のブロウが味わえる。体調こそ万全でなかったにせよ、この日の演奏が生涯最後のステージになろうとはアート本人も思わなかったはず。壮絶な人生を生きた名アルト奏者のラスト・ステージをぜひ味わって欲しい！

自叙伝『ストレート・ライフ』

1981 年に出版された『ストレート・ライフ アート・ペッパー衝撃の告白自伝』（スイング・ジャーナル社）は、アート・ペッパーの 3 人目の妻ローリーが生前のアートの録音を原稿に起こし、知人・友人のインタビューや雑誌の記事などから構成されたもので、510 ページに渡ってジャズ・麻薬・監獄・アルコール・セックスなど壮絶なまでのアートの生き様が綴られている。アートの音楽を語る上で、ウエスト・コースト・ジャズ全盛期の 50 年代のプレイと 74 年の復帰後～晩年にかけてのプレイとで好みが別れたりもするが、この自叙伝に触れることでアート・ペッパーというジャズマンに対する思いが変わるかもしれない。アートの方が少し年上ながら同じ時代を生き、共にウエスト・コーストで活躍し素晴らしい共演作も残しているチェット・ベイカーの生き様にも通じるものがあるが、こんなにまで破天荒にジャズマン人生を貫く男達はもう出て来ないだろう…。

シナノン

シナノン (Synanon) とは米国カリフォルニア州サンタモニカにある薬物中毒者のためのリハビリテーション施設で、アートは 69~71 年の間をこの場所で過ごしたが、他にもジャズ・ミュージシャンではフランク・リハク、ジョー・パス等が入所していた。

アートと日本

1977 年の初来日以来 81 年まで 5 度の来日を果たしたアートは大の親日家としても知られ、自叙伝『ストレート・ライフ』でも日本について語られている。初来日の演奏は『ファースト・ライヴ・イン・ジャパン』で、最後の来日公演の演奏は『アバシリ・コンサート 1981』で聴けるが、その間の 78 年には妙中俊哉氏プロデュースにより『再会 (Among Friends)』をリリースし、80 年には石黒ケイの『アドリブ』に参加している。